

## 曼殊院門跡

## 曼殊院門跡

曼殊院は、もと伝教大師の草創に始まり（八世紀）、比叡山西塔北谷にあって東尾坊と称した。天曆元年（九四七）、当院の住持、是算国師は菅原氏の出であったので、北野神社が造営されるや、勅命により別当職に補せられ、以後歴代、明治の初めまで、これを兼務した。また天仁年間（一一〇八〜九・平安後期）、学僧、忠尋座主が当院の住持であったとき、東尾坊を改めて曼殊院と称した。現在の地に移ったのは明暦二年（一六五六）で、桂宮智仁親王の御次男（後水尾天皇猶子）良尚法親王の時である。親王は当院を御所の北から修学院離宮に近い現在の地に移し、造営に苦心された。庭園、建築ともに親王の識見、創意によるところ多く、江戸時代初期の代表的書院建築で、その様式は桂離宮との関連が深い。歴代、学徳秀れた僧の多かった名刹である。（国宝、黄不動尊・古今和歌集曼殊院本を蔵する。）

**庫裡**（重要文化財）現在の通用口。石造の大黒天は鎌倉時代のもの、甲冑を帯びた姿で仏教の守護神となす。入口の大妻屋根の額「媚竈」は良尚親王筆。論語八佾篇に「その奥に媚びんよりは、むしろ竈に媚びよ」を引用。

**虎の間**（重要文化財）（大玄関）襖は狩野永徳筆と伝えられる。（桃山時代）

**竹の間**（次の玄関）襖は江戸時代の版画。

**孔雀の間** 岸駒筆。（江戸時代中期）

**大書院**（重要文化財）江戸時代初期の書院建築。

奥の仏間は、もと書院の上段の間であったが、大書院西方にあった宸殿とりこわしの際（明治初め）、現在の場所にうつしたものである。本尊は阿弥陀如来。歴代の位碑を安置する。

なお、建築は、桂離宮との様式の類似に注意すべきで、引手等に種々の意匠をこらしている。（瓢箪、扇、等）

**滝の間** 障壁画は狩野探幽筆。（江戸時代初期）床の間の中央に滝の絵があった。欄間は、月型、出くずしである。

十雪の間 障壁画は狩野探幽筆。

違い棚は、様式、用材ともに桂離宮のものと同じで、同時に作られたものという。

庭園 (名勝庭園指定) 遠州好みの枯山水である。

庭の芯に滝石があり、白砂の水が流れ出て、滝の前の水分石からひろがり、鶴島と亀島とがある。鶴島には五葉の松(樹令約四百年)があつて、鶴をかたどっている。松の根元にはキリシタン燈籠があり、クルス燈籠又は曼殊院燈籠と呼ばれる。亀島には、もと地に這う亀の形をした松があつた。庭園右前方の霧島つつじは、五月の初旬、紅に映えて見事である。この枯山水は、禪的なものと王朝風のものゝ結合して、日本的に展開した庭園として定評がある。

小書院 (重要文化財) 大書院とともに書院建築の代表的なものといわれ、とくに小書院は、その粹を示すものである。屋根は、大、小書院ともに柿ぶき。釘かくしは富士の形に七宝の雲を配したもの。小書院入口の梟の手水鉢は、下の台石は亀、傍の石は鶴をかたどっている。

なお、奥に茶室「八窓軒」がある。

富士の間 襖は狩野探幽筆。額は、松花堂昭乗筆。(「閑静亭」)

欄間は菊を型どつたもので、元禄模様の先駆をなすといわれる。

黄昏の間 上段の間(玉座)。襖は探幽筆。

違い棚は、曼殊院棚とよばれ、約十種の寄せ木をもつて作られたもの。

丸炉の間 日常用の茶所。この奥に親王の日常の間がある。

額は田鑑国師宗円筆。(「寒更」)

中庭 一文字の手水鉢、井戸があり、庭の芯は松の根元の石。

京都市左京区一乗寺竹之内町四十二

## 曼殊院門跡

電話(〇七五)七八一一五〇一〇番